

ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』を読む

——「直示的定義（説明）」に係わる部分——

黒 崎 宏

以下は『哲学的探究』の中で、特に「直示的定義（説明）」に係わる部分を、独断と偏見であるかも知れないという事を恐れずに、読み且つ解読したものである。私としてはそれなりに、一点の疑惑も残さずに、読み解きたいのである。徹底的に解読したいのである。そのかわり、冗長であると思われる所や強引であると思われる所も、あるであろう。おおかたの御批判を乞いたい。

なお、[] は私の挿入である。また、[] をとばして読んでも、文章は通じるようになっていく。原文のイタリックにはアンダーラインをつけてある。

26. 人は思っている：言語を習うという事は、対象の名前を言う、という事によって [初めて] 成り立つのである；しかも、人間、形、色、痛み、気分、数、等々、についてさえ [、 そうなのである]。先に [(第15節で)] 言ったように—— [或るものに] 名前をつけるという事は、或るものに名札を付けるという事と似ている。人はこの事を、語の使用の準備である、と言うことが出来る。[それは良いとして、] しかし、それは何に対する準備なのか？

27. 「我々は [様々な] ものに名前をつける。そうすれば我々は、それらについて語る事が出来るし、話の中で、それらに言及することが出来る。」——あたかも、「名前をつける」という行為には、我々がこれから為す事が既に与えられているかの如く、なのである。あたかも、「ものについて語る」と言われる事が [、我々がこれから為す事として] 唯一つ存在するかの如く、なのである。ところが実は我々は、命題でもっ

て、全く種々様々なことを為すのである。[ちなみに、] 全く異なった機能を有する [様々な] 叫びについてだけでも、考えてみよ。

水!

先を続けなさい!

ああ!

助けて!

よろしい!

だめだ!

[これらの例を見ても] 君はやはり、これらの語は「対象についての名前」であると言いたいのか?

第2節と第8節の言語には、名前についての問いは存在しない。さて、名前についての問いと、それに応えて与えられる直示的説明 [の一对] は、それ自体で一つのゲームである、と言えよう。そして本来我々は、「これは何て言うの?」と問う——その結果、名前を教えてもらうのであるが——ように、教育され、訓練されるのである。そしてまた、或るものについて或る名前を発明する、という言語ゲームも存在する。即ち、「これを……と言う。」と言い、以後その名前を用いるのである。(そういう訳で、子供は、例えば自分の人形に名前をつけ、そして以後は[その名前で]、その人形について語り、また、その人形に語りかけるのである。ここで直ちによく考えよ:我々が人を呼ぶときに用いる人名の使用が、如何に特異であるかという事を!)

28. さて人は、人の名前、色の名前、物質の名前、数の名前、方位の名前、等々を、直示的に定義することが出来る。二つの木ノ実を指さして「これが「2」である。」と言う数2の [直示的] 定義は、完全に正確である。——しかし、では、如何にして人は2をその様に定義できるのか? この [直示的] 定義が与えられる人は、人が「2」で何を名指そうとしているのかを、そのとき知らないのではないか;そして彼は、君は木ノ実のこのあつまりを「2」と呼んでいるのだ、と思うかもしれない!——彼がそう思うことは、恐らくそうは思わないであろうが、有り得ることなのである。彼はまた、逆に、私が木ノ実のこの集まりに名前をつけようと思うとき、その名前を数の名前であると誤解するかもしれない。そしてまた同様に、私が或る人の名前を直示的に説明するとき、

彼はそれを、色の名前、人種の名前、そして方位の名前であるとすら、
思うかも知れない。即ち、直示的定義は、如何なる場合にも、あれやこ
れやに解釈される可能性があるのである。

29. おそらく人はこう言う：2は、ただ「この数が「2」である」と
いう様にしてのみ、直示的に定義され得るのだ。何故ならこの直示定義
では、「数」という語が、言語の——文法の——どの場所に「2」とい
う語を置く [べきな] のかを知らせるから。しかしこの事は、この直示
的定義が理解され得るに先だって、「数」という語が説明されていなく
てはならない、という事を意味している。——この [直示的] 定義に含
まれている「数」という語は、勿論、その場所を——我々が「2」とい
う語を置く場所を——知らせている。そして我々は、「この色は……で
ある。」「この長さは……である。」等々、と言うことによって、誤解を
防止する事が出来る。即ち、ときには誤解はその様にして避けられるの
である。しかし一体、「色」とか「長さ」とかいう語は、ただその様に [「色
」として、或るいは「長さ」として、] しか理解されないのであろうか？
——今や我々は、当にそれらの語を説明しなくてはならないのである。
——そこで我々は、それらの語を他の語で説明する！ [そうすると、]
この説明の連鎖における最後の説明は、どうなるのであろうか？ ([こ
こで君は、] 「最後の」説明などは存在しない。」と言ってはならない。
その様に言うことは、君はまさに「この通りには最後の家など存在しな
い；人はいつでも家を付け加えることが出来るのである [から]。」と言
いたがっているかの如く、なのである。[しかし、人はいつでも説明を
付け加える事が出来るわけではない。])

「数」という語が2の直示的定義に必要な否かは、「数」という語が無
くては、彼がその直示的定義を、私が望むのとは異なって把握してしま
うか否か、という事にかかっている。そして勿論この事は、その直示的
定義が与えられる状況と、与えられる相手に、依存している。

そして、如何に彼がその説明を「把握」したかは、如何に彼がその説
明された語を用いるかに、示されるのである。

[ワイトゲンシュタインの脚注]人は、赤くない或るものを指して、「こ
れは赤くはない。」と言って]「赤い」という語を説明する事が出来るで

あろうか？ これは丁度、人がドイツ語〔日本語〕に精通していない人に「謙虚である」という語を説明すべきときに、その説明として、傲慢な人を指して「この人は謙虚ではない。」と言うのに似ているであろう。その様な説明法は曖昧である、と言っても、それでは、その様な説明法に対する議論にはならない。〔何故なら、〕如何なる説明も誤解され得るのである〔から〕。

しかし確かに、人は問う事が出来よう：我々は、〔赤くない或るものを指して、「赤い」という語を説明する〕その様な説明をも、「説明」と言うべきであらうか？——何故ならば、その様な説明は、我々が通常「赤い」という語の「直示的説明」と呼ぶものとは、思考に於て、勿論異なった役割を演じるのであるから；たとえその様な説明が、学ぶ者に対して、事実上同じ結果同じ働きをもたらすとしても、である。

30. それ故、人はこう言うことが出来よう：〔或る語についての〕直示的定義がその語の使用——意味——を説明するのは、如何なる役割をその語が言語に於て一般に演じるべきかが、既に明らかであるときなのである；それ故、もし私が、彼は私に色の言葉を説明したいと思っているのだ、という事を知っていれば、「これが「セピア」である。」という〔彼の〕直示的定義は、私に「セピア」という語を理解させるのである。——そして、人が以上のように言うことが出来るのは、如何なる種類の問いも「知っている」とか「明らかである」とかいう語と結合しているのだ、という事を忘れないときなのである。

人は、名前について問うことが出来るためには、既に幾らかの事を知っている（幾らかの事が出来る）のでなくてはならない。それでは、人は何を知っていなくてはならないのか？

〔人は、既に幾らかの事を知っていて、初めて、名前について問う事が出来るのである。そして、それに対して、直示的定義が与えられる。したがってこの場合には、その直示的定義は、概して正しく理解される。〕

31. 人が或る人にチェスの王の駒を示し、「これがチェスの王である。」と言うとき、——彼がチェスの規則を「王の駒の形」という規定だけを除いて他はすべて既に知っているのではないならば——人は彼に、それによってその駒の使用を説明した事にはならない。〔確かに〕人は、彼に

は未だかつて実際の駒は一つも示されなかったけれども、[したがって、彼は駒の形は知らないのではあるが、] 彼はチェスの規則を学習済みである、という事は想像できるのである。この場合、駒の形は[駒を表わす] 語の音、或るいは形に、対応するのである。

しかしまた人は、或る人が——かつて規則を習う、或るいは、規則を正しく表現する、という事無しに——チェスを覚えてしまった、という事も想像できる。彼は、例えば、初めは全く単純な盤ゲームを側で見ていて覚えてしまい、そして[同様にして、] 次第により複雑なゲームへと進んで行ったのである。[この場合、] 人は、彼にもまた——例えば彼には馴染みの無い形をしたチェスの駒を示して——「これは王である。」という[直示的] 説明を与えることが出来よう。そして、この[直示的] 説明もまた彼にその駒の使用を教えるとすれば、それはただ、駒が置かれる[文法上の] 場所が既に準備されている限りに於てなのである、と言えよう。或るいはまた：我々はただ——[駒が置かれる文法上の] 場所が既に準備されているときにだけ——直示的説明は彼に[駒の] 使用を教える、と言うであろう。そしてこの場合、その場所が既に準備されているのは、彼が既に規則を知っているからではなく、彼は別の意味で既にチェスをマスターしているから、なのである。

なお、次の様な場合も考えよ：私は或る人にチェスを説明するのである；私は、或る駒を指して「これは王である。王はシカジカに動くことが出来る、等々、」と言いながら、説明を始める。——この場合、我々は言うであろう：「これは王である。」(或るいは「これは王と呼ばれる。)」という言葉は、彼が既に「駒とは何かを知っている」ときにのみ、[「王」という] 言葉の説明なのである。それ故それは、例えば彼が既に別の[盤] ゲームをしていた、或るいは、他人がしている[盤] ゲームを「理解して」見てきた——等々であるときにのみ、[「王」という] 言葉の説明なのである。そしてその様なときにのみ、彼はチェスを学ぶ課程で、——その[「王」と呼ばれる] 駒を指して——「これは何と言うの？」と適切に問う事が出来るのであろう。

我々は言うことが出来る：既に何がしかの事を名前で始めることを知っている人のみが、名前について有意味に問うことが出来る。

我々はまた、[名前を] 問われた者が「名前は自分で決めよ。」と答える、という事も想像することが出来る。——そしてこの場合は、質問者

はあらゆる事に自ら責任を負わなくてはならない。

32. 或る未知の国へ来た人は、ときには、その国の住民達の言語を、彼らが彼に与える直示的説明で学ぶ；そして彼は、この説明の意味を、しばしば推測しなくてはならないであろうし、そしてときには正しく、ときには間違っ、推測するであろう。

さて、私が思うに、我々は次のように言うことが出来る：アウグスチヌスは、[子供が] 人間の言語を習う状況を、あたかも、子供が未知の国へ来て、その国の言語が分からないかの如くに、記述したのである；即ち：子供は既に言語を知っているが、ただその国の言語は知らないかの如くに、記述したのである。或るいはまた：子供は既に考えることは出来るのだが、ただ未だ話すことは出来ないかの如くに、記述したのである。そしてここでは、「考える」とは、「自分自身に語る」といった何かを意味しているのである。

33. しかし、もし人がこう言って反論したら、どうであろう：「直示的説明を理解するためには、彼は既に言語ゲームに習熟していなくてはならない、というのは真ではない；彼はただ、説明者が何を指示しているのかを——それゆえ例えばそれは、対象物の形なのか、色なのか、或るいは数なのか、等々を、——当然の事ながら知っている（或るいは、推測する）必要があるだけなのである！」——それでは一体、「形を指示する」「色を指示する」「数を指示する」という事は何に於て成り立つのか？ [例えば、君は命令される：] 一枚の紙を指示せよ！——そして今度は、その形を指示せよ——また今度は、その色を指示せよ！——今度は、(奇妙に響くが) その数を指示せよ！——さて君は、それら [の命令が言うこと] を如何に行なったか？——君は、「指示する」という事でその都度何か別の事を「意味して」いた、と言うであろう。そして、もし私が、それは如何に行なわれるのか、と問えば、君は「私は私の注意を形、色、等々、に集中したのである。」と言うであろう。さてしかし、私は更に訊ねる：その注意の集中は如何に行なわれるのか。

或る人が、或る花瓶を指して、「この素晴らしい青を見よ！——形は問題ではない。——」或るいは「この素晴らしい形を見よ！——色はいつでもよい。——」と言うと考えよ。もし君がこれら二つの命令に従う

とすれば、君は [それぞれで] 異なった事をするであろう、という事には疑いが無い。しかし君は、君の注意を色に向けるとき、常に同じ事をするであろうか？ とにかく、種々の場合を想像してみよ！ [以下で] 私は幾つかの場合を挙げてみよう：

「この青はあの青と同じか？ 君には違いが見えますか？」——

君は絵の具を混ぜながら、言う：「空のこの青とぴったりの青を作ることは難しい。」

「晴れてきた。またもや青い空が見える！」

「見よ、これら二つの青の如何に異なった印象を与えることか、を！」

「君、そこに青い本が見えるか？ ここに持って来てくれ。」

「この青信号の意味は……」

「この青は一体何んで言うのですか？——「インディゴ」ですか？」

ときには人は、形を手で隠す事によって；或るいは、視線をその物の輪郭に向けない様にして；或るいは、対象を見つめ、かつて何処でこの色を見たかを思い出そうと努める事によって、注意を色に向けるのである。

ときには人は、形を模写する事によって；或るいは、色をはっきりと見ないように、眼を細める事、等々、等々、によって、注意を形に向けるのである。[原文では、段落無し。]

[そこで] 私は言いたい：人が「注意を形や色に向ける」時には、これら及びこれらと似た事が起こるのである。しかし、我々に、彼は注意を形、色、等々、に向けている、と言わせるのは、これらの事のみではない。[彼は注意を形、色、等々、に向けている、という事は、これらの事に於て成り立っているのではない。]それは丁度、チェスに於ける手は、ただ単に、或る駒が板の上でシカジカにずらされるという事に於て成り立っているのでもなければ、——しかしまた、その時の駒を動かす人の思いや感情に於て成り立っているのでもない、というのと同じである；チェスに於ける手は、我々が「チェスを一局する」「チェスの問題を解く」等々と呼ぶ状況に於て、[初めて] 成り立つのである。

34. しかし、ある人が次のように言うと言想像せよ：「私は、注意を形に向けるときには、いつも同じ事をする。即ち：私は眼で輪郭を辿り、そしてその際、……と感じるのである。」さて、彼は或る人に、これら

全ての事を体験しながら、或る円形の物を指示して「これが「円」である。」という直示的説明を与える、と想像せよ。——しかしこの場合その[或る]人は、たとえ、その説明者が眼でその形を辿るのを見、且つ、その説明者が感じるものを感じるとしても、この[直示的]説明を[その説明者の意図とは]別様に解釈する事が出来ないであろうか？[出来るのである。]即ち、ここに於ける「解釈」もまた、如何にその人がその説明された語を使用するか、例えば、「円を指示せよ！」という命令を受けるとき、何を指示するか、という事に於て、[初めて]成立ち得るのである。——何故なら、「説明をシカジカに思う」という表現も、「説明をシカジカに解釈する」という表現も、その説明を与えられ、耳にした時に伴って、生じる過程を表わしてはいないから。

35. 勿論例えば、形を指示する事に対して、人が「特徴的な体験」と呼ぶ事が出来るものは存在する。例えば、形を指示する際には、指で或るいは視線で輪郭をなぞる、という事がそれである。——しかし、この様な事が私が「形を意味している」全ての場合に起きるとい事は殆ど無いし、また、何らかのそれとは違った特徴的な過程が「形を意味している」全ての場合に起きるとい事も殆ど無い。——しかしまた、その様な事がその様な全ての場合に繰り返し起きたとしても、我々が「彼は形を指示しているのであって、色を指示しているのではない。」と言うか否かは、状況——指示の前後で生じる事——次第なのである。

何故ならば、「形を指示する」「形を意味する」等々という語は、(あの本ではなく)「この本を指示する」「机ではなく、椅子を指示する」等々といった語の様には、用いられないから。——この点に関しては、[一方に於て]我々は「この物を指示する」「あの物を指示する」という語の使用を如何に様々に習い、そして他方また我々は「形ではなく、色を指示する」「色を意味する」等々、等々、という語の使用を如何に様々に習うか、という事を考えるだけでよい[であろう]。

さきに言ったように、ある種の場合には、特に「形を」或るいは「数を」指示する場合には、それに特徴的な体験と指示の仕方が存在する。——ここで「特徴的」と言うのは、それらの体験や指示の仕方は、形や数が「意味される」場合には、(常にではないが)しばしば繰り返されるからである。しかし君は、チェスの駒を[——特定の木片として、では

なく——] チェスの駒として指示する際に特徴的な体験をも知っているか？ [知らないのではないか？] それにも拘らず、人は言うことが出来る：「私は、私が指示しているこの——特定の木片ではない——駒は「王」である、と思う。」([指示にとって「特徴的な体験」は不要なのである。そして同様に、] 認知、希望、想起、等々、[にとっても、「特徴的な体験」は不要なのである。])

36. そして我々は、駒を指示する際、我々が無数の似た場合に為すことを、ここでも為すのである。[即ち、或る仕方でその駒を指さすのである。ところが、] 我々が(例えば、色に対する、ではなく)形に対する指示と呼ぶところの、一つの身体的行動を挙げる事は出来ない。そこで我々は、「形に対する指示」には或る精神的活動が対応しているのだ、と言うのである。

我々の言語が身体[的行動]を推測させるところに、[調べてみたら]身体[的行動]が無い場合、我々は、そこには精神[的活動]があるのだ、と言いたくなる。[勿論これは、悪い哲学的誘惑である。]

37. 名前と名付けられた〈もの〉の間の関係は何か？——さて、この関係は[実際] どういうものであるのか？ 第2節の言語ゲーム、或るいは、その他の言語ゲームをよく見よ！ [そうすれば、] それらに於いては、この関係は例えば何に於いて成り立っているのかを、見る事ができるのである。この関係は、多くの事に於いて成り立っているが、[なにかんづく、] 名前を聞くと名付けられた〈もの〉の像が心に浮かぶ、という事〔第6節〕に於いても成り立っているのである。そしてまたこの関係は、その名前は名付けられた〈もの〉に書かれている、という事〔第15節〕に於いても、或るいはまた、名前は名付けられた〈もの〉を指示する際に声に出して言われるという事に於いても、成り立っているのである。[全体として第6節を参照の事。]

38. しかし、例えば第8節の言語ゲームに於ける「これ」という語、或るいは、「これは……である。」という直示的説明に於ける「これ」という語は、[一体] 何を名指しているのか？——もし混乱を引き起こしたくないならば、これらの語は何かの名前である、とは決して言わない

ことが、最も得策である。——しかし、奇妙なことに、「これ」という語については、かつて、それこそが本来の〔意味での〕名前である、と言われていたのである。〔ラッセルは彼の「論理的原子論」でそう主張していた。〕それ故、我々がそれ以外に「名前」と呼ぶものは全て、ただ不正確な近似的な意味でのみ名前なのである、というわけである。

このような奇妙な考え方は、——言うなれば——我々の言語の論理を昇華しようとする〔当時の哲学の〕風潮に由来するのである。〔そして事実、若きウィトゲンシュタインもその中におり、「論考」は——言うなれば——我々の言語の論理を昇華しようとした作品なのである。さて、〕その様な奇妙な考え方に対する、本来のあるべき対応は、こうである：我々は非常に種々様々な語を「名前」と呼ぶのである；〔そして、或る語を「名前」と呼ぶ場合、その〕「名前」という語は、〔その或る〕語の使用は、多くの異なった、しかし、相互に多くの異なった仕方でも類似している様な使用なのである、という事を表わしているのである；——しかし、この様な様々な使用の中には、「これ」という語が用いられる種類の使用は含まれていない。〔したがって、「これ」は名前ではない。〕

しばしば我々は、例えば直示的定義に於いて、名付けられるものを指示してその名前を言う、という事は確かに真実である。そして同様に我々は、例えば直示的定義に於いて、或る物を指示して「これ」という語を言う〔、という事も確かに真実である〕。そしてまた、「これ」という語も名前も、しばしば文脈の同じ場所に現われるのである。しかし、名前に特徴的なことは、まさに、名前は「これがNである。」（「これがNと言われる。」）という直示的定義によって説明される、という事である。しかし我々は〔「これ」をも〕、「これが「これ」である。」とか「これが「これ」と言われる。」とかいう直示的定義によって説明するであろうか？〔勿論、説明しはしない。〕

「これ」をも、「これが「これ」である。」とか「これが「これ」と言われる。」とかいう直示的定義によって説明されるのだ、とする考えは、命名という事を或る言わば神秘的な過程として考える考え方と、関係している。命名は、語と対象の間の或る奇妙な結合に見えるのである。——そして、その様な奇妙な結合は、つまりは哲学者が——それこそが当にその様な結合関係である所のものを取り出すために——眼前の或る対象を見つめ、そして数え切れないほど或る名前、或るいはまた「これ」

という語を繰り返せば、実際に生じるのである。何故ならば、哲学的諸問題は、言語が仕事を休んでいるときに生ずるのであるから。[眼前の或る対象を見つめ、そして数え切れないほど或る名前、或るいはまた「これ」という語を繰り返すという事は、言語がそれ本来の仕事を休んでいるときに、初めて可能なのである。そして、その様なときにこそ、語と対象の間の或る奇妙な結合が生じ、そこから色々な哲学的諸問題が生じるのである。]そしてその様なとき我々は、命名は——対象に対する洗礼同然な——なんらかの奇妙な精神的行為である、と確かに想像することが出来る。そしてまた我々は、「これ」という語を対象に対して言い、それによってその対象に話しかける、という事もできるのである——もっともこれは、「これ」という語の、哲学するときのみに生じる奇妙な使用であるが——。

[ワイトゲンシュタインの脚注]「これは青である。」という言葉が、ある時は、人が指示している対象についての言明を意味し——またある時は、「青」という語の説明を意味する、という事は如何にして生ずるのか？ それ故、第二の場合には、[「これは青である。」という言葉]実は「これは「青」と言われる。」を意味しているのである。——そうであるとすれば、ある時は、「である」という語は「と言われる」を意味し、「青」という語は「青」を意味する事が出来るのか？ そしてまた、ある時は、「である」という語は実際に「である」を意味することが出来るのか？

或る人が、情報提供を意味していた事から、或る語の説明を引き出す、という事も起こり得る。([ワイトゲンシュタインによる]余白への注意書き：ここには、容易ならざる迷信が隠されている。[[ただし、この注意書きの意味は不明である。]])

私は「ぶぶぶ」という語で「雨でなければ、私は散歩に行くでしょう。」を意味することが出来るか？ [意味することが出来るような言語を、考えることは可能である。] —— [そういう訳で、]ただ言語の中でのみ、私は或る事を[他の]或る事で意味する事が出来るのである。この事は、「意味する」の文法は「或る事を想像する」という表現などの文法と似ていない、という事をはっきり示している。[一般に想像では、言語外のもものが想像されるのである。]
